

企業×○○で共に創る！

新潟市東区オープンファクトリーから考える、 「産業のまち」東区のこれからの参加して

開志専門職大学 事業創造学部

草間 大悟

新潟市東区のオープンファクトリーから、「産業のまち」としての東区の現在地と今後の可能性について深く考える機会となった。私は大学で事業創造やビジネスの視点から地域や企業の価値創出を学んでいるが、本イベントは教科書だけでは理解しきれない、現場に根ざした産業のリアルを知る場であったと感じている。

オープンファクトリーの取り組みは、企業価値の向上や社員育成、顧客との共創関係の構築、さらには産官学金連携による地域活性化など、多くのメリットを持つ。特に印象に残ったのは、外部へのPR効果だけでなく、社内の意識変化につながっている点である。有限会社阿部仏壇製作所では、全く異なるターゲット層に企業を知ってもらうことに加え、既存社員のモチベーション向上やチーム力の強化を目的としていた。また、有限会社吉川鉄工所では、工場を開くことをきっかけに職場環境の整理が進んだという話から、オープンファクトリーが「見せるための施策」であると同時に、「組織を内側から変える仕組み」でもあることを実感した。一方で、方向性の設定や組織体制の構築、運営負担の増大といった課題も明確である。数日間の開催にとどまる現状では、産業観光として定着しているとは言い難いという指摘もあった。燕三条工場の祭典の事例では、分科会を通じて人材育成や企業間の横のつながり、情報共有を継続的に行い、「イベント後の361日」を意識した仕組みづくりが行われていた。この点は、東区が今後「産業のまち」として発展していく上で、重要な示唆を与えていると感じた。

事業創造を学ぶ学生として、私ができることは大きく三つあると考える。第一に、学生という外部視点を活かした価値の言語化である。トゥクサイトの学生目線によるツアーやスタンプラリーの事例のように、企業側が当たり前だと捉えている技術や仕事の魅力を、第三者の視点で再編集し、伝える役割を担うことができる。第二に、情報発信への貢献である。SNS やデジタルツールに慣れた世代として、オープンファクトリーの体験や企業の想いを自分の言葉で発信することは、企業認知の向上や将来的な採用にもつながると考える。

第三に、企業と共に課題解決に関わる姿勢である。アイウッドの EC サイト向け商品開発のように、企業の閑散期や未活用資源をビジネスの視点で捉え直すことは、学生にとって実践的な学びとなるだけでなく、企業側にとっても新たな選択肢を提示することになる。

秋元哲平氏の「失敗してもいいから、やらないよりはやった方がいい」という言葉が象徴するように、オープンファクトリーは挑戦の連続であるだろう。学生としては、単なる参加者で終わるのではなく、企業や地域と継続的に関わりながら、小さな成功と失敗を共有する存在でありたい。東区が「産業のまち」として次のステージへ進むために、学生もまた共創の担い手として関わり続けることが重要であると強く感じた。